

清和堂明朝体
組見本伽羅 L

魔術 芥川龍之介

ある時雨の降る晩のことです。私を乗せた人力車は、何度も大森界隈の険しい坂を上ったり下りたりして、やっと竹藪に囲まれた、小さな西洋館の前に梶棒を下しました。もう鼠色のペンキの剥げかかった、狭苦しい玄関には、車夫の出した提灯の明りで見ると、印度人マティラム・ミスラと日本字で書いた、これだけは新しい、瀬戸物の標札がかかっています。

マティラム・ミスラ君と云えば、もう皆さんの中にも、御存じの方が少くないかも知れません。

あの時分 国木田独歩

さて、明治の御代もいや榮えて、あの時分はおもしろかったなどと、学校時代の事を語り合う事のできる紳士がたくさんできませんでした。

落ち合うごとに、いろいろの話が出ます。何度となく繰り返されます。繰り返しても繰り返しても飽くを知らぬのは、またこの懐旧談で、浮き世の波にもまれて、眉目のどこかにか苦闘のあとを残すかたがたも、「あの時分」の話になると、われ知らず、青春の血潮が今ひとたびそのほおにのぼり、目もかがやき、声までがつやをもち、やさしや、涙さえ催されます。

私が来た十九の時でした、城北大学といえは今では天下を三分してその一を保つとも言いそうな勢いで、校舎も立派になり、その周囲の田も畑もいつしか町にまでなってしまうしたがいわゆる、「あの時分」です、それこそ今のおかたには想像にも及ばぬことで、ちゃんと就業の鐘が鳴る、それが田や林や、畑を越えて響く、それ鐘がと素人下宿を上ぞうりのまま飛び出す、田んぼの小道で肥えをかついだ百姓に道を譲ってもらうなどというありさまでした。

魔術

芥川龍之介

ある時雨の降る晩のことです。私を乗せた人力車は、何度も大森界隈の険しい坂を上ったり下りたりして、やっと竹藪に囲まれた、小さな西洋館の前に梶棒を下しました。もう鼠色のペンキの剥げかかった、狭苦しい玄関には、車夫の出した提灯の明りで見ると、印度人マティラム・ミスラと日本字で書いた、これだけは新しい、瀬戸物の標札がかかっています。

マティラム・ミスラ君と云えば、もう皆さんの中にも、御存じの方が少くないかも知れません。ミスラ君は永年印度の独立を計っているカルカッタ生れの愛国者で、同時にまたハッサン・カンという名高い婆羅門の秘法を学んだ、年の若い魔術の大家なのです。

春

は、あけぼの。

やうやう白くなりゆく山ぎは少し明りて

紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は、夜。月の頃はさらなり。闇もなほ。

螢の多く飛び違ひたる。また、ただ一つ

二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。

雨など降るもをかし。

【枕草子：清少納言】

アラビアンナイト

「アラジンと魔法のランプ」

「アリババと40人の盗賊」

「ティファニーで朝食を」

「アラベスク・ノクターン」

伽羅のけむりが
ただようイメージ

と き え あ
さ く お い
し け か う

人外魔境 天母峰

小栗虫太郎

神踞す「大聖氷」

わが折竹孫七の六年ぶりの帰朝は、そろそろ、魔境、未踏地の材料も尽きかけて心細くなっていた私にとり、じつに天来の助け舟のようなものであった。では、それほど私を悦ばせる折竹とはいかなる人物かというに、彼は鳥獣採集人としての世界的フリーランサーだ。この商売の名は、海南島の勝俣翁によつてはじめて知った方もあろうが、日本はともかく、海外ではなかなかの収入になる。ことに折竹は、西南奥支那の Hsifan territory——すなわち、北雲南、奥四川、青海、北チベットにまたがる、「西域夷蛮地帯」通として至宝視されている男だ。

羅生門

芥川龍之介

ある日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかには誰もいない。ただ、所々丹塗の剥げた、大きな円柱に、蟋蟀が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない。